
Fate/Zero 闇を駆ける者

刹那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e / Z e r o 闇を駆ける者

【Nコード】

N 8 6 8 0 X

【作者名】

刹那

【あらすじ】

もしも、間桐雁夜が一般人として生活を送っていなかったら、あの事件に巻き込まれて新たな力を得ていたら、間桐の名を捨てていたら、その力を持って聖杯戦争に挑んでいたら、これはそんな物語。魔術師ではない雁夜が聖杯戦争を戦い抜く。
本作はF a t e / Z e r oの二次創作です。

序章（前書き）

作者は原作のFate/Zeroを読んでいません。

アニメに感化されて描いています。

よって原作と設定が変わる可能性がありますのでご了承ください
それでも良い方はお読みください。

キャラの口調がおかしい場合もあります。

序章

「マスター、二体のサーヴァントが港の工場地帯で確認、さらに片方のマスターと思われる女性も確認しました」

『ああ、こちらでも確認できた』

オレはサーヴァントと放った使い魔のおかげでその様子が確認できた。

「それと、近辺にもう一体のサーヴァントの存在も確認できました」

『もう一体？』

「はい、さらにそのサーヴァントのマスターと思われる少年も確認できました」

自らのサーヴァントの言葉に自らも風術を行使して付近を探索。

すると強い魔力を持った存在がいることに気がつき、

そのすぐ近くにもう一人魔力を持つものがいることを確認する。

おそらくそこから港区の工場地帯の二体のサーヴァントの闘いを見るためだろうか。

だが見るだけなら使い魔だけで十分のはずだ。

『わかった、引き続き監視を続けてくれ』

その言葉を最後にサーヴァントとの念話を終える。

近くにあった椅子にどっかりと倒れこむように座る。

そして自らの令呪を仰ぎ見るように掲げる。

『ついに、始まったんだな。聖杯戦争が』

そう言いながら掲げた腕を降ろす。

二体のサーヴァントが激突したという情報を聞いてやっと実感した。

『正直、マスターとか、サーヴァントとか。俺にでか過ぎるものだったから実感湧かなかったんだけど』

そこまで言って区切り、深呼吸をして立ち上がる。

『ここまで来たら後戻りは出来ない、俺には絶対にやらなければならぬことがある』

だからこそ、もう迷う時間は無い。

『始めよう聖杯戦争を、魔術師同士の殺し合いを、あの娘の笑顔を奪った聖杯を、破壊するためにも』

壁に掛けていた服を取り身に着ける。

この服は彼が戦闘を行うときに用いる、いわゆる戦闘服。

この服には簡単な戦術が施されており、ちょっとした衝撃では破壊どころか装着している人間にもダメージは無い。

まあ、サーヴァントの一撃を食らえば一発であろうが。

サーヴァントからの情報で敵のサーヴァントの位置はわかっている。

行き場所は決まった。

『いくぞ、アサシン』

「御意、マスター……………雁夜」

俺の、間桐雁夜ではなく。

緋神雁夜としての闘いをしよう。

願うことは唯一つ、あの娘の笑顔を取り戻すために

序章（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

第一話 帰ってきた精霊術師（前書き）

義経です。

第一話の投稿です。

第一話 帰ってきた精霊術師

「落後者がよくおめおめと顔を出せたものよ」

『久しぶりだな、くそ爺』

オレは間桐邸の一室で一人の老人と対峙していた。

老人から浴びせられる視線は完全に嫌悪のもの。

「その面もう二度とわしの前に晒すでないと、確かに申したはずだな」

老人はその嫌悪を隠そうともせずはこちらに向けてくる。

それはそうだろう、何せオレは間桐を捨てた男なのだから。

『遠坂の次女を、桜ちゃんを養子に迎え入れたそうだな』

「耳の早いことよ。して、それがどうした。」

オレがその話を聞いたのはつい最近、偶然幼馴染の葵と出会ったときだ。

それを聞いたからオレは二度と戻らないと決めていたこの間桐^{いえ}に戻ってきた。

『そうまでして、間桐に魔術の因子を残したいか』

「それをなじるか、貴様が。間桐を捨て、魔術師であることを止め、名も捨てた貴様が」

そう、あの日。

オレは間桐の名を捨てた。

過去の自分と決別するために、新しい自分として生きるために。

『そうだな、あんたとしてはそいつが許せないってところか』

「たわけ、碌な魔術回路も持ち合わせておらぬ貴様なんぞに価値など無いわ」

自らの息子である自分を魔術回路の有無で決める。

その臓硯に少し苛立ちを感じながらも冷静を保つ。

「して、何のようだ。緋神雁夜」

緋神雁夜、それが今のオレの名前。

元々は偽名として使っていたが、現在はそれを正式に使っている。

『取引だ臓硯』

「取引？」

『そうだ、お前の願いは聖杯による不老不死だろう』

人と呼べるものではなくなったこの老人。

それでもなお永遠の命を欲しているのだ。

「それで」

『今回の聖杯戦争でオレは聖杯を持ち帰る。そうなれば、桜ちゃんに用は無いだろう』

「あの小娘から、手を引けと」

『そうだ』

「うゝむ」

臓硯はこちらの言葉を聞いて考えるように手をあごに持っていく。

だが臓硯はこの条件を飲むはずだ。

臓硯は失うものはない、オレが勝手に戦うというのだ。

そして、

「よかるう、貴様との取引に応じてやるう」

その言葉を聞いて安堵の息が漏れる。

『なら、桜ちゃんは今どこにいる』

そう言つと臓硯はニヤリといやらしい笑いを浮かべる。

その笑みを見てオレはこれまでの経験で察することが出来た。

「遠坂の娘は今蟲倉におるわ」

その言葉がオレの脳内を駆け巡った。

「どうする雁夜、すでに壊れかけの小娘をそれでも救うと」

『当たり前だ』

救って見せる、あの娘を。

オレの命に代えても、絶対に。

それから、一年の時が過ぎた。

第一話 帰ってきた精霊術師（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

第二話 呼び出される影（前書き）

第二話の投稿です。

今回はいきなり急展開です。

第二話 呼び出される影

間桐邸の一室に雁夜と臓硯が揃っていた。床にはサーヴァント召喚のための魔法陣が描かれている。

雁夜の手には令呪が刻まれている。

「クッククツ、まさか貴様にサーヴァントを御するほどの魔力を持ち合わせていようとわな」

『どうでもいいが、さっさと召喚を始めさせて貰うぞ』

臓硯の話ではすでにセイバー、アーチャー、ランサー、ライダー、そしてバーサーカーの召喚はすでに行われたらしい。

そうなると残りのサーヴァントはキャスター、アサシンの二体だけ。それならばオレの生き方からしておそらくは、

「では、はじめよ」

その言葉にオレは歯を強く噛み合わせ、息を吸い込み呪文を言う。

『告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ』

召喚のための呪文を発するたびに令呪が反応し魔力が集中されている。体中の魔力が騒ぎ出す。それと同時に心が躍る。

『誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を

敷く者』

これから始まるであろう闘いに。
命を掛けた闘いに、奇跡の瞬間を拝めるという事実。

『汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ！』

魔法陣が輝き、部屋を光が包み込む。

「我が名、アサシンのサーヴァント。召喚の儀に従い、ここに参上した」

冷淡な声、心を殺したような低い声が耳に聞こえてきた。

これがアサシンのサーヴァント、漆黒の体に白い仮面を嵌めた長身の男性がそこに立っていた。

『ようこそアサシン、オレが君のマスターの緋神雁夜だ』

そうつって一歩前に踏み出す。

「カッカッカッ、アサシンとは貴様らしい」

臓硯はオレがアサシンを召喚したことに納得しているようだ。

だがオレはその言葉を見殺しにしてすぐにアサシンに命令を下す。

『アサシン、これからの話は後にしよう、オレの部屋に来てくれ』

「御意」

アサシンはそう言って霊体化する。

臓硯もサーヴァント召喚に成功したので一安心ということで部屋から立ち去ろうとする。

だがオレは臓硯が動き出す前にアサシンに念話で話しかける。

『（アサシン）』

「（何用でしょう、マスター）」

アサシンもこちらの声を出している話ではないという意図に気付いて念話で応える。

『（君の宝具を教えてください）』

アサシンの真名はこれまでの聖杯戦争ですでにわかっている。

問題はそれがどのハサンであるか。

どんな宝具を持っているかで動き方が変わる。

「（はっ、我らの宝具は妄想幻像^{ザバーニヤ}、精神を分割しそれに応じた体を

得るものです」

その言葉を聞いてオレは内心笑みを浮かべた。どうやら都合が良い宝具を持つアサシンを引いたようだ。

オレはこの日のために準備してきた野望を実行に移すことにした。

そのためにまず桜ちゃんを保護する必要がある。

今日は蟲倉をサーヴァントの召喚に使っているので寝室で眠っているはずだ。

『（ならばアサシン、この屋敷の中にいる少女を保護してくれ）』

「（承知しました、すぐに一人送りましょう）」

アサシン程の暗殺者なら対象を見つけるまでに時間は要らないだろう。

だからこそオレはアサシンのサーヴァントを召喚したかったのだ。

『（それと、オレが合図したら間桐臓硯を殺せ）』

「（御意）」

アサシンはオレが父を殺せと言った言葉に何の迷いもなく応えた。

さすがは超一流の暗殺者である。

アサシンとの念話を終えたオレは臓硯を見る。

この部屋に用はないため蟲倉から出るために階段を目指して歩いていた。

やるなら今しかない。

『アサシン！』

オレは声高らかに自らのサーヴァントに命じた。

その声に反応して妄想幻像^{ザバーニヤ}を使い十人のアサシンに分れる。

一体は霊体化したまま桜を救うためにすばやく移動している。

「ムッ」

臓硯がオレの声と動き出したアサシンに不審を抱き歩みを止めこちらを振り返る、その瞬間であつた。

ーーーーードスッ！

九体のアサシンが一斉に臓硯を切り刻む。

持ち前のダガーで刻んでいく。

だがこんな簡単に臓硯が死ぬはずが無い。

「貴様、雁夜。なぜわしを襲える。だがこの程度で」

殺せると思ふな、そう言おうとしたのだろう。

だが俺はそんな言葉を待ってやるほど優しい人間じゃない。

周囲の精霊を掻き集め力をこめる。

『消え失せろ、臓硯』

手のひらから炎の弾を出して臓硯にぶつける。

直撃した炎弾は破裂して臓硯を包み込む。

「オオオオオオオ」

先ほどまでとは打って変わって苦しみだす臓硯。

『いくらあんたとはいえ、炎には耐え切れまい』

臓硯は蟲を糧に生きているも同然。

その蟲を体内から燃やしているのだ。

「オノレ雁夜。貴様、ワシガ死ネバ。桜ヲ救ウコトハ出来ンゾ」

『安心しろ、くそ爺。手立てが無いわけじゃないんだよ、だから』

オレは最後の一撃を加えるために集中する。

周囲を風の精霊が包み込み、集約していく。

『我が司りし清浄なる精霊よ、その力を解き放たん』

浄化の風が体の周囲を取り巻く。

今の状態の臓硯がこれを食べれば完全に消え去るだろう。

『終わりだ臓硯、お前の願いはかなわない。これで終わりだ、くそ爺！』

「雁夜アアアアアア！」

風が部屋を包み一気に荒れ狂う風と成りて臓硯を消滅させる。

結構な威力を持つ風のため古くなり脆くなっている床の石が宙を舞う。

そのせいで破片などが壁に当たったり飾りなのかわからないが黒いものもいろんな方向に吹き飛ばされていき、中には蟲倉の入り口から飛び出るものもあった。

そして完全に臓硯の影が見えなくなったとき、風をおさめる。

『ふう、終わったな。いや、始まったのか』

「マスター、蟲倉内の間桐臓硯の反応の消滅を確認しました」

いつの間には一人に戻っていたアサシンは臓硯が消えたと断言する。

さすがにサーヴァントの目は掻い潜れないだろう。

『礼を言うぞアサシン』

「サーヴァントに礼など無用です」

さすがはアサシンである、おそらくマスターの命に従うのは当然と
いうことだろう。

『それでもだ、君たちがいなければ臓硯は殺せなかっただろう』

それは事実だ、万全な状態で臓硯に炎を浴びせても、消滅しきる前
に逃走するだろう。

アサシンが臓硯を斬ってくれたお陰で止めをさせたのだ。

だが、まだ最後にやら無ければならないことが残っている。

桜を救わなければ。

第二話 呼び出される影（後書き）

なんと今回で臓硯がやられました。
しかも呼び出されたのはアサシン。

第三話 少女の涙（前書き）

最初に記したとおり作者には原作知識はほとんどありません。そのためおかしいところがあれば指摘をお願いします。なるべく反映したいと思います。ですがあくまでこの作品の感想をお願いします。

第三話 少女の涙

緋神雁夜は魔術師であつた。

十一年前に間桐を捨て魔術も捨てるはずであつた。

だが、一度裏の世界に足を踏み入れた者がそう簡単に表の世に馴染める筈も無く。

ある事件を境に、また裏の世界に足を踏み入れることとなる。

魔術の才能など普通の魔術師に比べて劣る雁夜がそれらと戦うには新たな力を得る必要があつた。

それ故に多くのものを習い、多くのものと戦つた。

優れた才は無かつたが死と生を彷徨うほどの地獄の修練である程度までの能力を得ることが出来た。

だが、所詮は凡人である。

才能高いものには決して敵うことは無い。

それを覆すのは策略、経験、そして生への執着心。

命あればまた戦うことも出来る。そう教えられたが故に彼は撤退を恥とは思わない。

退くことを恥とは思わない、本当に恥ずかしいのはすべてを諦めて

死ぬことだと思っている。

潔さなど無い、高潔な考えなどいら無い、守るべき者のためならば全てをなげうってでも救い出す。

彼はすでに、魔術師ではなかった。

蟲倉から出てきた雁夜を待っていたのは先ほど桜の保護に向かわせた女アサシンであった。

先ほど吹き飛ばされて蟲倉から跳び出て行った残骸はどうやらこの女アサシンが片付けてくれたようだ。

「マスター、お連れしました」

その腕に抱かれる形で桜がいる。

桜は何が起きたのかわかっていないのだろう、いつも通りの虚ろな瞳をしている。

そうさせたのは臓硯、だが今まで止められなかったのはオレの責任。

『桜ちゃん、これを飲んでくれないか』

そういつて懷から小さなビンを取り出す。

中には透明の液体が入っている、この日のために知り合いから受け取った品だ。」

おかげで凄まじいほどの借りを作ってしまったがそれはいいだろう。

「はい」

感情の籠らぬ声で返事をして受け取る。

そしてビンのふたを空け中身を飲み干す。

すると液体の影響で体がビクツと震える。

それを見たアサシンが聞いてくる。

「マスター、あれは？」

『まあ、簡単に言えば虫下しだ』

「は？」

『それもただ虫下しじゃない、仙術を扱う知り合いから取り寄せたものだ』

仙人までとはいかないがかなりの術者で信頼できる人物からの贈り物だ。

「はあ」

アサシンは何を言っているのかわからなかった。

なぜそれをこの状況で飲ませるのか。

だがすぐに理解した、先ほど主が殺した老人のことを。

蟲使い、おそらくこの少女の体の中にも蟲が入っていたのだろう。

この少女からは主以上の魔力を感じる、いまだ成熟されていないがすでに主を超えている。

そんな少女を育てればとてもよい魔術師になるだろう。

蟲はそのためのものなのだ。

” なんと、卑劣な ”

暗殺者は心を殺さねばならない。心を乱してはいけない。

それでも、わかっていても怒りを覚える。

まだ年端もいかぬ子供を道具として扱うなど。

アサシンも暗殺者は道具のようなものだと思っている。

だがそれは暗殺者として確立したらの話である、そうならば自らの子供といえども道具として扱う。

しかし暗殺者として開花していない子供を道具として扱うことなど無い。

暗殺者になるまでは情愛をもって育てるのだ。

それを、先ほどの老人は

『それが、魔術師だ』

雁夜は呟くように言った。

本当に小さい声で、隣にいるアサシンにしか聞こえないような小さい声。

だがその声には多くのものが籠っていた、怒り、悲しみ、後悔、懺悔。

この少女をここまでしたのは自分にも責任があると言っているようであった。

『家のために、根源に至るためなどとふざけたものの為に子供を道具のように扱う』

雁夜がそう言っている内に桜も楽になったのかこちらを見上げてくる。

「お爺様の蟲が」

いなくなった、そう不思議そうに言った。

その言葉を聞いて安堵した、どうやらうまくいったらしい。

まあ、すでに自分が先ほど召喚の前に服薬しておいた。

スパイが齒に毒を仕込んでいるように、齒に薬を仕込んでおいて召喚寸前に服用する。

不審に思われればあの爺のことだ、きっと中断していただろう。

だがサーヴァントの召喚ともあり、そこまで気が回らなかったようだ。

『仙力をこめた駆虫薬だ、さすがの爺の蟲もひとたまりも無いだろう』

不思議そうに見上げてくる桜にかがんで頭を撫でる。

『もう間桐臓硯は死んだ、桜ちゃんの悪夢は終わった。もう、あんな地獄はあじあわなくていいんだ』

それを言っても桜は何を言っているのかわかっていない。

あの臓硯が死んだ、そんなのありえない。

きつとどこかでまたこちらを見てるんだ。

だがこの屋敷の中から臓硯の気配は感じない。

蟲たちを通じて大体居場所はわかるのだが、先ほどからいきなり臓硯の存在が認識できなかったのだ。

そして蟲たちの声も聞こえない。

まるであの頃のように。

「・・・なんで」

桜は自分の頬を流れるものをはじめは何なのか理解できなかった。

だがすぐに気付いた、涙である。

涙は頬をつたい床に滴り落ちている。

最後に涙を流したいだろうか、涙の流し方など忘れてしまっていたのに。

昔は涙を流すのは決まって悲しいことがあった時だった。

でも何故か今流す涙は悲しいものではないような気がする。

それが何なのかは理解できない。

『泣いていい、泣いて良いんだよ』

雁夜はやさしく抱きしめる。

壊れてしまった悲しき少女。

壊れなければ、生きていけなかったであろう。

それほどまでに悲しい現実を突きつけられた少女。

おれはこの娘を救わなければならない、この命に代えても。

それからしばらく泣き続ける桜を抱きしめて、泣きつかれて眠ってしまつた桜を女アサシンに預ける。

『君は桜の護衛を頼む』

「了解いたしました」

そう言つて桜を抱えて寢室に戻っていく。

それを確認すると雁夜は懷からタバコを出して火をつける。

「マスター、あの少女の元に行かなくてよろしいので」

『その前に終わらせなきゃいけないことがある』

事実上保護者である自分が着いて行かないことに疑問を持ったアサシンが尋ねる。

確かに一緒に着いて行つて傍に居てやるのが一番だろう。

だがその前にやらなければならないことがあるのだ。

『間桐の魔術を終わらせる』

第三話 少女の涙（後書き）

指摘どしどし送ってください。
冷やかしは、やゝよ！

第四話 始まりの夜明け

雁夜と現界したままのアサシンは二人で屋敷の中を歩いていた。

行き場所はある部屋、この家の長男の部屋だ。

部屋の前に着くと乱暴に扉を開ける。

『入るぞ兄貴』

中に入ると酒を飲んで泥酔していた間桐鶴野がいた。

乱暴に開けたのでこちらに気付いたのか酔っている状態でこちらを向く。

「雁夜、何のようだ」

鶴野は桜の魔術の教育を行っていた。

だがその罪悪感と無力感から酒に逃げていた。

『間桐臓硯は死んだ、故に間桐の魔術刻印は完全に破壊された』

「か、雁夜。何を言って」

状況が飲み込めていない鶴野に構わず傍まで近づく。

掌に魔力を込め自分の武器を顕現させる。

眩い光とともに一本の日本刀が雁夜の右手に収まる。

この武器は師から餞別に貰った代物だ、はっきり言って身に余るほどの名刀である。

それを鶴野の首元に持っていく。

「ひいつ！」

怯えた鶴野に雁夜が冷めた瞳でさらになるべく感情の籠らぬ声で言う。

『魔術を捨て唯の人として生きろ、財産は多くあるだろう。それを使って息子を連れてどこか遠くで暮らすんだな』

「わ、わかった」

雁夜の有無を言わさぬ言葉に鶴野はただただ頷くしかなかった。

『今日中に荷物をまとめて出て行け。いいな』

すでに酔いも覚めたのであろう、鶴野は壊れた人形のように首をがくがくと揺らしながらうなずく。

「あ、ああ」

『用はそれだけだ。さっさとこの家から出て行け』

刀を戻して踵を返し部屋を出るために歩き出す。

後ろで兄が荷物をまとめる音が聞こえたが気にも留めずに桜の元に向かう。

部屋に着いた雁夜に女アサシンが立ち上がり一礼する。

『桜はどうしてる』

「先ほどの疲れからか、すっかり眠っています」

『そうか、よかった』

兄に向けたときの言葉とは違いとても優しい声で言う。

それほどまでにオレは安堵しているのだ。

だが問題はこれで終わりではない。臓硯を殺し、兄の鶴野もこの家から出すことにした。

でも、まだ桜の心は癒えていない。

壊された心は簡単には戻らない、長い時間と一緒にいてやれる人間が必要なのだ。

それは途方もなく時間がかかるだろう、だが

『辛くなんか無い、この娘はもつと辛いことを味わったんだ。大人

のオレが守らなきゃいけないんだ』

絶対に、守り抜く。

桜と再開したあの日に誓ったこと。

この地に戻ってきたのは、いまだ間桐に心残りがあつたのを師から見抜かれ、最後のけじめをつけるために帰ってきたのだ。

だが今は大切な者を、桜を救うことが戦う理由の一つになっている。

『アサシン、これから聖杯戦争が終わるまで桜の護衛を頼む』

「この命に代えても」

女アサシンはそう応える。

これから聖杯戦争が始まる、おそらく自分も唯ではすまないだろう。

この屋敷も襲われるかもしれない、結界などもあるがサーヴァントが相手では限界がある。

だがアサシンならば桜を守って逃げ切れるだろう。

「おじ・・・さん」

桜の声がして思考をやめ声の方を見る。

すると虚ろだがしっかりと目を開けた桜がこちらを見ている。

桜は人の気配に敏感だ、おそらくそれも魔術の訓練のせいだろう。

『桜ちゃん、まだ眠っていても良いんだよ』

「おじい様は本当に死んじやったの」

『ああ、確実にね』

オレは断言した。

それはアサシンもそう言っていたからだ。

「なら、私はこれからどうすればいいんだろう」

『え？』

「だって今までお爺様の言うとおりにしてきたから」

その言葉を聞いて愕然とした。

この娘は、桜はこれまで臓硯の言う通りにしてきた。

それが当たり前だったのだ。

故に、臓硯が死んだ今、桜に命令する人物はいない。

この自由すら忘れてしまった少女はどのような心理状況なのだろうか。

『オレのせいだ』

雁夜はそう呟いた。

なぜもつと早く助けられなかったのだろうか、この家に帰ってきた時点で隙をつけば臓硯を殺せるだけの力はあったはずだ。

でもオレはそれをしなかった、理由は簡単である……怖かったのだ。

人を捨てた父が、あの頃の弱い自分を見下した父が、力を信じられない自分に。

もしあいつならば、神の風を司るあいつならばすぐに救っただろう。

ただム力つくという理由で。

所詮オレは、

「泣いてるの、おじさん」

桜のその言葉を聞いて自分が涙を流していることに。

「つらいの？」

自分を救ったことが、そう言っている様であった。

だがこれだけは言える。

『違うよ、桜ちゃん。おじさんはね、これからのことを考えていたんだよ』

「これから？」

『これから先のこと』

聖杯戦争に生き残る、当面の問題はそれ。

臓硯を殺しても自分が死んでは意味が無い。

桜を救うために自分も死ねないのだ。

『なあ桜ちゃん』

「なに？」

『これから、おじさんの仕事が終わったら。旅行しないかい』

「旅行？」

『ああそうだ。おじさんの友達や色々な人に会うんだ。そして』

思い浮かぶのは世界最強の風使い、そして彼の父親と弟。従姉妹にあたる炎を司る少女。

外国にいる自分の師、色々なことを助けてくれた仲間たち。

『いろんな場所に行くんだ』

自分の生き方を変えた場所、自分の世界が変わった場所。

そこに桜を連れて行きたい。

『どうする桜ちゃん』

「行きたいです」

『じゃあ、約束だね』

雁夜は小指を出す。

これをするのは何十年ぶりだろうか幼い頃に幼馴染とした以来だろ
う。

桜も同じように小指を出す。それを繋ぎ、

『ゆゝびゝきゝりげゝんゝまゝん、うゝそつゝいゝたゝら、はゝり
ゝせゝんぼゝんのゝまゝす、ゆゝびきゝた』

桜が寝たのを確認してから女アサシンだけを残してアサシンとともに
部屋を後にする。

二人は無言で雁夜の部屋まで歩いていく。

その時、雁夜がアサシンにいう。

『アサシン』

「何でしょうか?」

『勝つぞ、この戦いに』

「御意」

すでに夜が明け空が白くなっていた。

第四話 始まりの夜明け（後書き）

四話目いかがでしたか。

第五話 戦準備

寢室を後にした雁夜はアサシンと二人で部屋にいた。

『改めて自己紹介からしとくか』

よく気付けば自分は名乗ったが相手から名乗ってもらっていないことに気付いた。

いきなり臓硯を襲わせた自分の責任であるが。

『オレは緋神雁夜、元は間桐の魔術師で十一年前にこの間桐^{いえ}を出奔、その後外国に渡って精霊術者になった』

「精霊術者と言えば、精霊を司りそれを操る者で」

『オレはそんなに大層なものじゃない、凡人の域を出ない二流だからな』

事実雁夜の実力は他の精霊術師と比べたとき大きく劣る。

だがそれでも戦い抜いてきたからには理由がある。

『ここに来るまでは友人の風術者と一緒にある屋敷で仕事をしていた』

友人と言うより戦友に近い存在である。

ただし実力は完全に友人のほうが上だ。

雁夜がどうあがいても勝てない相手である。

台風クラスの風を扱う術者にどう勝てと。

『一応風術と炎術の使い手だ。ただし本職に比べると威力は低いかな』

元々、炎と風の精霊魔術は相対するがゆえにともに精霊と契約することは不可能である。

ただしそれは通常の精霊術師であればこそ、雁夜は捨てたとはいえ魔術師の家柄に生まれた魔術師だ。

いわゆる例外という方法を使用しているのだ、ただしそれを使っただとしても術の威力は格段に落ちる上に術の習得、使いこなすことが困難になる。

神風などの正統な術者と違って雁夜はもともと持つ才能が無い、故にどうやっても威力では勝てないのだ。

それゆえに雁夜は気が遠くなるほどの修行をこなしてきた。それでもまだ、一流の術者には遠く及ばない。

「マスターの能力は把握しました。次は我らが」

雁夜の能力を聞いたアサシンは自らのことを語る。

「我はアサシンのサーヴァント、真名はハサン・ザッバーハ。ハサンとお呼び下さい」

そう言つて一礼する、これについてはすでに過去の聖杯戦争で知りえた情報だ。

さらに先ほどの念話で反故についても確認している。

その上クラススキルの気配遮断もA+と高い。

自己紹介もそこそこに本題に入る。

『まずは今後の方針を説明する』

「はっ」

いまだ方針も決めずに臓硯殺害と鶴野の追放をしていたので何も決めずに一日が終わろうとしていることに気付いた。

桜も眠つたので今から決めて行動するつもりである。

『アサシンという特性上、真正面からぶつかるのは分が悪いな』

「仰る通りでございます、我らアサシンは純粋な戦闘力では他のサーヴァントに比べると劣ります。しかし、その反面」

『気配遮断スキルを使った謀報、追跡、そして暗殺に長けている』

「御意にございます。承知していると思いますが我らの宝具は妄想^{ニヤ}幻影^{ニヤ}でございます」

妄想幻像^{ザバーニヤ}、現界の際に精神を複数に分担し、複数人で行動できると言うもの。

アサシンの気配遮断スキルと相まって諜報には最高の宝具である。

ただし欠点もある、ハサンはあくまで総体で一人のサーヴァントなのである。

量の増加は質の低下を招くと言う言葉通りに分裂すればするほどハサンの能力は低下していく。

元々のステータスも大して高くないハサンにとってその状態で他のサーヴァントとの戦闘は望まれるものではない。

『当面は各サーヴァントとマスターの動向を調べ、能力を調べるか』

「それが妥当でございましょうマスター」

『隙をつけば敵のマスターを討つことはハサンの能力ならば容易いが』

「サーヴァントに阻まれればいささか難しいでしょう」

敵の拠点を見つけても魔術師の持つ工房で結界やトラップのある上にサーヴァントの防衛だ。

如何に気配遮断スキルA+を持つハサンでもそこでマスターを討つのは容易ではない。

『くつくつくつく』

「どういたしました、マスター」

急に笑い出した雁夜にアサシンが尋ねる。

『なに、こういった非現実的なことを大真面目に話していることが可笑しくてな。魔術師ならば慣れているんだろうが、それを捨てたオレからすれば可笑しくてな』

「無理もございません、本来魔術師でないものが聖杯戦争に参加することは異例ですからな」

『だがこれからはそうも言っていられない。聖杯を勝ち取るべく闘わなければならないからな』

魔術師たちの闘争、そうなれば奴も出てくるはずだ。

この地のセカンドオーナー、遠坂家の当主も。

いまさら過去の因縁を持ち込むつもりは無いが強力な敵だろう。

プライドの高い奴だが実力は確かだ。

出来れば他の奴が潰してくれればいいんだが奴の実力と名門の遠坂の魔術師が呼ぶほどのサーヴァントを相手にしては他のサーヴァントでも苦戦するだろう。

『厄介な相手だ』

「誰がですか」

『遠坂時臣、冬木のセカンドオーナーで魔術の名門遠坂の現当主だ。魔術師としての実力は言う事無し、さらに遠坂邸は冬木で第二位の霊脈だ。あいつ程の魔術師が呼ぶ英霊となれば超一品級のはずだ、いささか分が悪いな』

「その遠坂当主とは知り合いで」

『まあ、昔ちよつとな』

同じ冬木の魔術師だ、顔ぐらい合わせたことはある。

何より厄介なのが奴の才能。遠坂時臣と言う男は平凡な才能しか持たぬ魔術師であつた。

しかし過酷な試練を課しそれを乗り越えることで一流の魔術師になった男だ。

もしあいつが天才だったならば、慢心や驕りという隙をつけたかも知れないがああいう努力のタイプはそういったものが少ない。

それに何となくむかつく奴だ。

『最も魔術師らしい魔術師だな』

その言葉こそが遠坂時臣を形容するにふさわしい言葉。

根源に到るために魔術を極め続ける、それは理解できる。だがそれは、家族を捨ててても成さなければならぬのか？

桜ちゃんと凜ちゃんが争わないようにする為という事はわかる。家督を継ぐということはそれほどまでに大事なことなのだと。

だが奴も知っていたはずだ。奴の、間桐臓硯の異様さを。それを知っていて尚、奴は桜ちゃんを養子に出した。

オレはそれが憎い、あの娘^こを結果的に苦しめた奴が、それをとめる事の出来なかった自分が、だから。

これはオレの仕事なのだ。時臣に問いたです。桜が大切なのかを、魔術師であることを理解したうえで愛せるのかを。

「してマスター、あなたが聖杯に何を望みますかな」

『………そういえば聖杯はなんでも望みを叶える願望器だったな』

「………」

雁夜の部屋になんとも言えない空気が流れる。

「………マスター、まさか忘れていらっしやったのですか」

さすがにこれにはハサンも哑然としている。おそらく桜の寝室にいる女アサシンも同様だろう。

それ以前に全マスターが聞いても同様の反応をするだろう。

本人に関しては、

『いや、桜を救う事と臓硯を殺すことに考えが違ってたからな。あつはっはっ』

などと言っている始末である。

己の過去に踏ん切りをつけるために戦いに参加したのだ。元々願いなんてものは存在していない。さらに桜の件がありいっそう忙しくなったのですっかり頭の中から消えていた。

もしかしたらどこぞやの征服王並みに天然な発言かもしれない。

『それにオレには願うものは無いぞ』

「は？」

アサシンは雁夜の言葉に耳を疑った。

魔術師ならば根源への到達、魔術師でなくとも何か願うものがあるはずだ。

それなのに自分のマスターは無いと言い切ったのだ。

『オレには世界を救うなんていう崇高な考えもなければ、世界を我が物にするなんて野望もない、無論根源に至るなんてのもどうでもいい話だ』

「ならば、この聖杯戦争を闘う理由は」

『そんなの決まっている桜のためだ。まあ、始めは違ったんだがな』

「始めは違つと」

『そうだ、元々この家に、魔術師としてのオレにけじめをつけるつもりで闘いに参加したからな』

だが、今は断言できる。

『今は桜ちゃんを養子に出した時臣に間桐の、臓硯が行つた事の恐ろしさを伝え、それでも尚桜を愛せるかを問う』

身体中を蟲に犯された娘を、それでも愛せるか。

マスターは何を言っている。命を欠けて闘う理由が娘を愛せるかを問うただけだと。

『オレの願いは唯一つ、桜ちゃんが笑顔を取り戻すこと。さしずめ聖杯戦争はそのための手段って奴だな』

桜の幸せのためならば命を懸けても良い

何故だろうか、その言葉に自然と笑みがこぼれる。

どこの世界に目の前に何でもかなう願望器があるのにそれに目もくれず、ただ一人の少女の笑顔を取り戻すためだけに命をかける人間がいようか。

私もかつてはこのような思いを抱いていたのだろうか、今となつては思い出せないが。暗殺者となる覚悟を決めた時に何を誓っていたのだろうか。

どうやら今回は面白いマスターに出会ったようだ。

ならば応えねばなるまい、それほどまでに気高き志を持つマスターに。

「このハサン、生前は暗殺者として生きてきました。その生涯に後悔などありません、故に聖杯に願うものなどありません」

膝を折り、頭を垂れ、忠誠を尽くす構えを取る。

「主が聖杯ではなく、その先にあるものを望むとあらば。我ら全ての命を散らしてでも、あなたに勝利を約束しましょう」

今ここに一つの主従が誕生した。

魔術師を捨てた非才の精霊術師と闇に生きる暗殺者が動き出す。

ただ一人の少女の笑顔を取り戻すために。

その先にあるのは死という絶望か、それとも・・・・・・・・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8680x/>

Fate/Zero 闇を駆ける者

2011年11月17日18時04分発行